

# 山の麓にある、 縁生の家 (後編)



## あまのずの ダイアログ 11



### 施設での看取り

**飯島**▼以前、ここで利用者さんを看取った時のお話を伺って良いですか？

**北澤**▼亡くなった時は72歳で、男性でした。その人は前から「ここで楽しく暮らしていきたい」という希望が強く、家族のみなさんにも了解をもらって、ここで看取っていきましようという話になりました。

その時に取り決めたのは、嘱託医の往診体制で救急車を呼ばないこと。少し苦しうなら嘱託医に往診してもらって、指示をもらってあとは私たちが看るということでした。部屋は、本人さんの思い出が深い写真を置いてその人の好みの通りにさせてもらいました。

亡くなる2ヶ月前に、利用者さんのための罫摺みのイベントが開催されました。ビニールのプールに罫を放って、素手で掴んでもらって、それを僕らが焼いてお昼のおかずにしてもらうイベントなんです。たまたま彼はその日が調子良くて、車いすですイベントをやっているところまで見に来て、ニコニコ笑って罫を触っていました。その後容態の悪化で外出が出来なくなっても、ことあるごとに「あの時の罫、良かったね」と楽しんで話をしていました。

ど、ちようどその日は寮で文化祭のイベントがある日でした。さすがに一人一人亡くなっているし、開催を躊躇っていたんです。

でも、家族の方が「やってよ」と。「故人はお祭りが好きだった。祭りをやりながら死ぬなんて最高じゃないか」と仰ってくれたんです。だから

予定通りイベントをさせて頂いて寮内に安置された彼の遺体は、イベントの最中に出棺しました。

一番良かったのは、利用者のみなさんがそこで、日常と死が隣り合わせにあったってことです。

彼が亡くなって葬儀される過程を見て、みんなが仲間の一人が人生を閉じたことに納得したんです。

**飯島**▼それまでは病院で亡くなるケースが多かったんです。急変すると搬入されて。

**北澤**▼そうですね。玄関先でお別れしてそのまま葬儀場へ行くという感じでしたね。しかし、生があつて死があるというのか、日常の生の方では死に向かっている人がいる。その過程を見ていることは非常に大事なことです。「自分もああいう風になるんだな」ということがまず分かります。



### 飯島 恵道

長野県松本生まれ。尼寺育ち。看護師としての経験を生かし、医療と宗教の領域を横断する「あまのず (amans=ama〈尼〉+ns〈ナース、看護師) 」として活動中。

### 障がいを持って迎える 老後の難しさ

**北澤**▼でも、ここ(悠生寮)で人生の幕を閉じたいって方に対しては、どういうスタイルをとればいいのか、どううってというのが、まだ分かりません。それは職員さんの意識も含めて、もう少し様子を見ないと、「一定の質を伴った対応にはつながらないかもしれない」。

**飯島**▼生活の場所に死があるのが、やっぱり職員さんにはちよつと違和感があったのでしょうか。  
**北澤**▼ありました。私が以前、利